

Title	週刊新聞『直言』総目次と解説
Sub Title	The contents and comments of the weekly newspaper "Chokugen"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.8 (1959. 8) ,p.46- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590815-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

週刊新聞『直言』總目次と解説

中 村 勝 範

解 説

一 ここに紹介する週刊新聞『直言』(以下『直言』とだけ記す)は明治三八年二月五日発行のものを第二卷第一號として直行社から発行され、同年九月一〇日第三二號をもつて發刊禁止の處分をうけたものである。したがつて明治三七年一月五日から加藤時次郎、白柳秀湖によつて月刊雑誌として發行されていた頃のものは含まない。第二卷第一號以降の『直言』は周知のごとく明治三八年一月二十九日第六四號をもつて自發的に廢刊した週刊『平民新聞』の後繼紙である。

週刊『平民新聞』はその第二〇號(明治三七年三月二七日)の社説「嗚呼増税」において編集發行の署名人堺利彦を獄に送り、第五二號(同年一月六日)の社説「小學校教師に告ぐ」その他で編集

印刷の西川光次郎、印刷の幸徳傳次郎が起訴された。ついで第五三號(同一三日)の「共產黨宣言」譯載により發賣禁止となり、西川・幸徳それに譯者の堺もまた起訴された。その頃、社會主義協會が禁止され(明治三七年一月一六日)、石川三四郎、齋藤兼次郎出願の『日本平民新聞』の發行は不許可にあい、(註1)片山潛主宰の『社會主義』は「渡米案内」と改題していた。こうした空氣のなかで週刊『平民新聞』は第五二號でうけた發行禁止の判決が執行されるに先だち、第六四號を終刊號とし、自ら廢刊した。この間の事情について堺利彦は「平民新聞はこれで消滅したが、平民社は消滅しなかつた。平民社は平民新聞廢刊の爲に、實質上何等の打撃をも感ぜず、別に週刊『直言』を發行して之に代へた」といひ、石川三四郎も「平民新聞の玉碎はただ形の上のことであつた。發行禁止の命令に機先を制しての處置に過ぎなかつた。これを以て、社會主義中央機

關としての『直言』紙の廣告が、既に平民新聞終刊號に掲載されたのである」と述べている。

週刊『平民新聞』終刊號には「本紙廢刊に就ての注意」があり、週刊『平民新聞』は消滅したが、日本社會主義の機關紙は嚴然として存在する。それが『直言』であると告げている。また廣告には週刊新聞『直言』は「日本社會主義の中央機關を以て任ぜんと欲す」と言明している。なおこの廣告の中で「特約せる執筆者」として原霞外、山田滴海、堺枯川、石川旭山、木下尙江、西川光次郎、白柳秀湖、小野有香、幸徳秋水、加藤時次郎、小川芋錢、松岡文子、小田頼造、山口義三の一四名をあげている。

『直言』の發行所は府下存原郡入新井宿直行社で、平民社は賣捌所であつた。發行兼編集人は終始原眞一郎（霞外）であつたが、印刷人は終刊號だけ齋藤兼次郎で他は山田金市郎である（但し第三〇號および第三一號は發行兼編集人および印刷人について何等記されていない）。週刊『平民新聞』の終刊から『直言』の發刊まで、その間七日であつた。

ところで週刊『平民新聞』が自刃しなければならず、『日本平民新聞』の許可は下らず、『社會主義』が『渡米雜誌』と改題しなければならなかつたときに、『直言』が社會主義の中央機關也として公然と發行しえたのは何故だろうか。この疑問に答えてくれるのは

『直言』創刊號に見える原霞外の「『直言』活動の時」である。要約すると次のようにならう。

『直言』は一年前に「直行團の機關誌として所謂社會改良主義を標榜し花々しく打つて出た」が、間もなく原霞外と加藤時次郎の二人だけになつてしまつた。そんなに微々たるものを今日まで發刊してきたのはなぜか。「或夜加藤氏は僕と社會主義論に夜を更かして、談偶々『直言』の事に及ぶや曰く、今こそ反古同様の雜誌だが、必ず一度は大活動する時が来るよ、否大に爲さねばならぬ時が来るよ『直言』が無くてはならぬ時が来るよ、ソレを樂みにお互に苦勞しやう家の費用をどんなに節約しても、此雜誌の維持金ぐらゐ出して行くよ、但し今は活動の時でないから、筆も極めて柔かく行くのが後日『直言』を役に立たせる爲に必要だ、同志が何んと誤解しても必ず成程ソウであつたかと首肯させる時が来る、當分は社會改良主義ぐらゐに止めやう」と。微々たる『直言』はこうして今こそ「此處に社會改良主義の假面を去つて、快なるかな、日本社會主義の中央機關となつたのだ」「初號發刊後、間もなく發起人の去つた時、幾多の迫害、幾多の侮辱の僕が身邊を圍みし事よ、併し僕は能く之を忍んだ」と。

週刊『平民新聞』は一本紙は日本社會主義唯一の機關新聞なり」といい、また「社會主義は土地、資本、其他あらゆる生産機關の公

有を主張する者なり」と毎號欄外に大活字で掲げていたが、このとき直行團の『直言』は「本紙は社會の惡制度改革の急先鋒也、何物も恐れず直言痛罵するは本紙の特色也^(註4)」という程度の線しかださなかつた。この社會改良主義が原の先の告白に見えるように『直言』およびその發行者への侮辱を招いたのだつた。しかし加藤の豫言のごとく、社會改良主義の線を保持していたが故に第二卷第一號から「本紙は日本社會主義の中央機關也!!!」と銘打つて發行することができた。

(註1) 『日本平民新聞』の不許可に際し、これに好意をもつていた代議士立川雲平、粕谷義三(政友會所屬)、花井卓藏(同好會所屬)は帝國議會においてそれが不當でないかという質問をした。『直言』第五號の「言論出版の自由に關する質問」は立川雲平の質問演説の速記録である。

(註2) 堺利彦「平民社時代」初期社會主義者の運動と生活」『中央公論』昭和六年一月號)

(註3) 「日本における非戰論」(『平民新聞』昭和二年三月三日號。なおこの新聞は敗戦後しばらくの間「日本でただ一つの無政府主義者の新聞」であつた)

(註4) 吉川守園『叛逆星霜史』(昭和十一年二月、不二屋書房)四二頁

二 『直言』創刊の辭である「本紙の責任及覺悟」をみると、

『直言』が日本社會主義の中央機關となつた、「本紙は日本社會主義の機關紙中、創刊日最も淺くして、發行の部數は最も少く、其發達は極めて遲鈍にして、其勢力は極めて微弱なる者也」しかしながら「言ふ可き所を直言し、爲し得べき所を直行して、噓れて而して已まんのみ」「今日以後の本紙は、獨り滿天下同志が公有の機關たるのみならず、實に其中央の機關たる者也、否な中央の機關たるのみならず、實に其唯一の機關たる者也、本紙の責任や大也」と述べている。

『直言』の責任というものは、まさにそこに述べている通りであつたが、その使命、主張、目的という點になると何等ふれるところがなかつた。このことは週刊『平民新聞』創刊號の「宣言」とは比較するまでもなく、「發刊の序」と比較しても低調なものであつた。「發刊の序」には「平民新聞は、人類同胞をして、他年一日平民主義、社會主義、平和主義の理想境に到達せしむるの一機關に供せんが爲めに創刊す」「夫れ階級的思想の牢固として抜く可らざること今の如く、黄金の勢力橫流天に滔すこと今の如く、好戰の情熱朝野を顛狂せしむること今の如きの時に在て、正義、人道、平和を主張し絶叫するは、極めて不利にして又甚だ危險の事ならずんばならず、而して是れ實に智者の難しとする所、況んや貧寒にして才なく學なき予等の如きをや」「而も謙つて思ふ、夫の正義、人道、平和

を主張し絶叫するの甚だ不利にして且つ危険なる所以の者は、却つて是れ之を主張し絶叫するの益々急要なることを證する者に非ずや、既に急要なることを知る是れ豈に志士の益を奮つて其不利危険を冒して顧みざるの秋に非ずや、然り予等一片の耿々は遂に予等の袖手沈黙を許さざる也」とあり、そこには迫りくる日露開戦にたいする斷乎たる反對の構えがあつた。

非戦に徹した週刊『平民新聞』の後繼紙であるが故に『直言』は改めて主義・主張・目的などを掲げることをしなかつたのであろうか。そういう點もあつたであらうが實情は岸本教授が指摘されておられるように「反戦記事は全く掲載するを得ず、幸徳、西川なき後の記事は社會主義の低調な宣傳にとどまつた」というのがその實情であろう。しかし非戦論を「全く掲載するを得ず」という點はどうであらうか。たとえば「大軍備の兒戲」（第一八號）は非軍備論という形で非戦につながるものではないだらうか。また「來るべき專制力」（第二五號）のなかに、現代の戦争が帝國主義戦争であることをやわらかく表現しこれを攻撃している點非戦論に通じないであらうか。しかしながらこうした間接的な表現まで非戦論にいれば、全紙面が非戦論で埋まつていたといわなければならなくなるかもしれない。週刊『平民新聞』のごとく正面切つての非戦論はまったく掲載されなかつたことはたしかである。

社會主義の主張も低調であつた。あえてあげるとすれば「日本政府、對、社會黨」（第一四號）および「難者に答ふ」（第二七號）の兩社説ぐらいのものである。しかしながらこの前者は東京市において衆議院議員補缺選舉施行（明治三八年五月一六日）せらるるにあたり木下尚江が「社會主義同志」の推薦により立候補したが、このときの政府の彈壓と社會主義者の抵抗との關係を論じたものである。また後者は社會主義を唱道するのは一身の不平でなく階級的公憤であり愛人救世の熱情であること、貧民勞働者に呼びかけるのは教唆煽動でなく階級的自覺を促すのであること、社會主義者は罪惡と悲慘の原因をすべて社會に歸すのではなく社會と個人とを分離して考えないことの三點について答えたものである。いずれにしても兩社説とも社會主義の思想・理論を積極的に提示したものではない。いわんや大衆に散布する「社會主義の檄」「社會主義と女子」（社會主義とはドンナもの）および「社會主義の大意」なる各チラシは、「社會主義」という文字こそ用いられているがその内容はもとより軽いものである。

他にロバート・ブラチフォードの「樂しき英國」が第二號から「通俗社會主義」として抄譯され一〇回連載されたのをはじめとして、イリーの書からマルクス主義についての譯をのせた「マルクスの學說」（第一八號および第一九號）、ハイドマンの『社會主義の經

「濟論」を譯して「生産方法の變遷」として五回連載している。これら外國書からの譯載をのぞけばオリジナナルな社會主義思想ないし理論の記事というものはほとんどない。

(註1) 岸本英太郎編・解説『明治社會運動思想 上』(青木文庫、一九五五年五月)の「解説」三―三頁。なお週刊『平民新聞』第五二號事件で、幸徳、西川が下獄したが、下獄に際し同志に發表したのが「兄弟姉妹よ」(幸徳)と「忍びの門」(西川)であつた。

(註2) 「社會主義の大意」は堺利彦が亡き妻の一周忌を記念してつくつたチラシである。

三 週刊『平民新聞』廢刊號に「露國革命の火」という記事がある。この革命運動のニュースおよび革命にたいする論評が週刊『平民新聞』の後繼紙『直言』のなかでかなり重要な比重を占めてくるのは當然である。そのことは『直言』記者が「吾人は無限の趣味を以てこの活劇を望見しながら、又暫くここに報道の筆を置き、以後電の到るを待つ」と第一號で記していることからでもわかつて、『直言』の「露國革命の火」(第三號では社説に「露國革命が興ふる教訓」を論じ「露國政府にして、今少しく人權を重んじ、自由を重んずるの心あつて、早く十年二十年の前に憲法を興へ議會を起して、民衆の不平を放散するの權を有せしめば、斯る忌むべく恐るべき血腥き歴史を染成すには至らなかつたであらう、吾人は露國革命

の史を讀む毎に、深く自ら戒め且つ自ら奮ふ所以の者多きを感じるのである」という言葉をもつて結んでいる。また第六號社説で「露國革命の淵源」が論じられ、「世界之新聞」欄で革命運動のニュースが詳細に傳えられている。

革命運動の記事と並んで幸徳が「露國革命の祖母」と題し、その第二號にエカテリナ・ブレシコウスカヤを論じている。「このブレシコウスカヤ夫人のコースこそ、幸徳の出獄後に踏襲したそのままのコースであつた」(註1)點を考えれば、ブレシコウスカヤのたどつたナロードニキとエス・エルの生涯を讀美の文字をもつて綴るこの評論は注目されてよいだろう。

ところで第二九號から終刊號まで「社會主義と愛國心」について外人の論文をのせているがこれはなぜだろうか。内容は

英國社會民主黨首領

ケルチ (第二九號)

獨逸社會黨首領

ペーベル (第三〇號)

伊太利社會黨首領

エンリコ・フェリ (第三一號)

佛國社會黨員

ギユスタヴ・エルヴェ (第三二號)

となつてゐる。これらの論文は「社會主義と愛國心との關係につき此頃歐洲社會黨間に於て大議論あり、巴里に於て發行する『社會黨評論』は此の問題に關する世界各國の名士の意見を求めて、毎號の紙上に掲載」(註2)しているが、その『社會黨評論』から譯出したもので

あるという。

それではヨーロッパの社會主義者のあいだでこのように「社會主義と愛國心」の問題が論議されなければならなかつたのはなぜだろうか。その邊の事情についてはケルチの論説のなかにうかがえよう。

すなわち「現時歐洲諸國社會黨の間に極めて重大なる一箇の問題起れり、即ち萬國聯合社會黨運動の死活に關する重大問題發生し來れり。問題とは何ぞや、萬國聯合運動は如何なる程度に於て愛國心と兩立し得るや、社會主義者は現體制の下に於ける防禦戰爭に参加すべき義務を負へりや否やといふもの即ち是れなり、之に就きて佛國社會主義者の間には二個の相異なる意見あり、同國社會黨の首領ヴェーラン氏は曰く、予は國民をして目下の極東戰爭に参加するを拒ましめ、本國紳士閥に對する反抗に依りて社會革命を開始せしむるに盡力せんと、エルヴェ氏は更に一步を進めて曰く、若し佛國が獨逸より攻撃を受くることありとも、予は國民をして侵入軍に抵抗すること勿らしめ、國內に於ける一層憎むべき敵に對して、其勢力を集注せんことを勧告すべしと、然るに獨逸社會黨の首領ペーベル氏は之に反して、社會民主黨は他黨と同じく獨逸帝國の寸土をも防禦せんとすと議會に於て宣言し、佛國に於てもゲロール、リシヤル氏等の一派は、エルヴェ氏の意見に對して強き反對の意を表せ

り」という状態であつた。同論文のなからケルチ自身の態度はどうであつたかをみると「國家の自由獨立の爲、及び民權救護の爲には、社會主義者も亦た國防軍を助くるの義務あり、然れども侵略的戰爭には斷じて反對し、内國の權力階級を敵として人民の自由の爲に侵入する外國軍をば斷じて歡迎せざる可らず、是れ洵に簡單明白なる原則」だとしていた。

戰爭にたいするヨーロッパの社會主義者の態度はこのように不統一であつた。ところが日本の社會主義者までこの問題の火中に投ぜられんとしていた。すなわち「世界之新聞」欄の「社會主義と愛國心」には、「而して『社會黨評論』は數日前平民社の堺氏に宛て、一書を送り、此の問題に關して特に日本社會黨の意見を求め來一たことを報じている。^(註3)これにたいして「吾人は此の問題に關する『社會黨評論』の諸論文を成るべく多く本紙上に紹介し而て後、改めて吾人の所見を開陳せん」といつているが、その後まもなく『直言』は終刊となつたためか、ついに日本の社會主義者は正面切つて「所見」を發表する機會をもたなかつた。

なお「トルストイ翁の返書」(第三〇號)についても簡単にふれておこう。ロンドンタイムス紙上に發表されたトルストイの日露戰爭に關する長論文が週刊『平民新聞』第三九號(明治三十七年八月七日)に譯載された。このとき「吾人同志は安部磯雄氏の名を以て翁

に一書を送りしが、殆んど一年を隔てたる此項に至り始めて其の返書に接し」これを譯載したのが「トルストイ翁の返書」である。

このように『直言』紙上にも外國の革命、社會主義あるいは進歩的な動向の影響があらわれているが、その頃の日本の社會主義勢力は國際的によどのくらいの評價を得ていただろうか。その點について有力な資料となるのが「萬國社會黨本部會計報告」(第二九號)であろう。これには「日本社會黨の責務は幾何」という副題がついているが、これは萬國社會黨本部の過去五年間の會計狀況、諸國の負擔金額およびこれに對して拂込をなしたる金額が記載されている。

これによると日本の社會主義者の負擔額は一〇〇法(約四〇圓)で獨乙、墮國、白耳義、丁抹、米國、伊太利、佛國の社會黨の三二分の一である。しかも一〇〇法のうち拂込額は七五法(約三〇圓)である。「讀者諸君は、此の表の中に於て、日本社會黨の負擔額が格外の少數にして、而も其少數すら完済する能はざるを見るの時能く冷汗の背に滴る無きを得るや」と『直言』記者は自己批判しているが「日本社會黨の責務」はこの數字の上にはつきり示されているのではないだろうか。

(註1) 田中惣五郎『幸徳秋水』(一九五五年一〇月、理論社)

二六三頁

(註2) 「社會主義と愛國心」『直言』第三〇號の「世界之新

聞」欄)

(註3) 右同

四 『直言』は週刊『平民新聞』に比較すると非戰論、社會主義の主張においてかなり低調であつた。これまでみてきたもの以外に、木下尙江、石川旭山の論説もあるが、それらはキリスト教的な立場からする良心的な社會批評ないしは社會改良主義であつた。週刊『平民新聞』が再三にわたり發賣禁止・起訴されたにもかかわらず、『直言』がその第三二號まで一度の打撃をもうけなかつたのはその主張が相當にゆるめられていたことを示す何よりの證據である。しかしだからといって社會主義者への彈壓が少しでも緩和されただけではない。傳道宣傳の妨害、演說會の禁止、選舉妨害等は峻烈をきわめた。また當局は一社會主義者を買収してスパイ活動をさせてさえた。^(註1) 幸徳・西川の缺如はいうまでもないが、この當局の彈壓も『直言』の主張を低調にさせた原因であろう。

全『直言』を通じてみた場合特色ある號は第二二號の「婦人號」、すでに例に引いたが木下の立候補を告げる第一五號および第二六號の「幸徳君出獄歡迎號」である。「婦人號」は全頁青色の色刷り、頁數も増し主要部分はほとんど婦人問題をもつて埋められた。このことは、しばしば社會主義婦人演說會などが催されたことも關連して當時の社會主義者は婦人の問題にきわめて熱心であつたことを

示している。第一五號では第一面に日本社會主義同志の名において「吾黨の候補者」として「品性、學識、才能（殊に雄辯）」に於て同志中に卓越せる」者として木下を衆議院候補に推薦し、木下は立候補にあつて「宣言書」を發表している。しかしその結果は「吾黨が僅かに一人の候補者を推薦せしを以て、五十萬噸の海軍を有し、百萬の軍隊を有する日本政府」の彈壓をうけ、ただの一度の演説會も開けず、わずかに三二票を得たにすぎなかつた。週刊『平民新聞』第五二號事件で入獄していた幸徳の出獄を歓迎する第二六號はその第一面に幸徳の大肖像を掲げ、特に赤色刷の天使を添えてこれを飾つた。堺は「僕の衷情」において「君の不在中、平民社が如何に其の重量を減じたか、『直言』の紙上が如何に落莫であつたか、それは僕が言ふ迄もあるまい」と書き、木下は「幸徳君を迎へて我を希望を語る」において「我が兄弟——年齢に於ては二歳の弟たり識見に於ては十年の兄たる——幸徳君よ」と呼びかけ「君の出獄は吾人同志の運動史上二新时期を畫するものに非ずとせんや」と期待している。また石川は「秋水兄を迎ふ」のなかで「世界各國の社會黨新聞は兄が入獄を聞くや筆を揃へて同情の文を掲載せり」と幸徳入獄がおこした國際的波紋についてふれているが、これらをよむにつけても幸徳が當時のわが國社會主義者のあいだでもつていた重さについてうかがえよう。

以上みてきたように『直言』にはいくつかの貴重な資料が織り込まれている。^(註3)『直言』の社説や評論の重要さはいうまでもないが、それ等に劣らず貴重な資料と思われるのは傳道行商のリポートとか遊説記事各地の集會、研究會の記事であるように思われる。週刊『平民新聞』にさかのぼり、こうした一見みおとされそうな記事に目を通すことによつてこの頃の社會主義運動の浸透の度合や受けとられ方が究明されるのではなからうか。このことはすでに西田長壽氏も指摘されておられるが、筆者も今更のごとくこのことを痛感したのである。^(註4)

ところで『直言』は第三二號をもつて發行を禁止された。九月五日、ポーツマス條約に不満をもつ群衆が日比谷公園に集り、その流れは燒打にまで發展し、戒嚴令が布かれた。『直言』第三二號は社説に「政府の猛省を促す」をかかけ騒動の責任が政府にあるとして攻撃した。このため發行停止が命ぜられ、それは解けぬままに『直言』は廢刊となつた。『直言』の廢刊と平民社の内紛とがやがて平民社解散（一〇月九日）という結末になつた。約二年間の平民社の歴史はここに止じた。（34・6・1）

（註1） スパイ事件については第一六號「秘密探偵嫌疑者處分」および第一七號社説「探偵論」に詳しい。

(註2) 第一五號「社會黨選舉演說會」(芝區兼房町)
(註3) 前掲『明治社會運動思想上』にあげられているのでこゝ
ではあえてふれなかつたが片山潜「労働者諸君に告ぐ」(第六

號)、「労働運動の復活期」(第一〇號)等の重要論文がある。
(註4) 『週刊平民新聞』(昭和二八年二月、創元社)の「解
説」一六頁

週刊新聞『直言』總目次

第二卷第一號(明治卅八年二

月五日)

本紙の責任及覚悟

萬國労働者團結せよ(山口孤劍)

内外時事・露國革命の火・大

倉組靴工の紛擾・旅順の露

軍死傷數・露國俘虜三萬に

上る・活版工の労働時間及

賃銀・雜誌『社會主義』控

訴葉却

平民新聞五十二號事件上告趣意

書

平民社より

『直言』活動の時

愛國心欠乏の原因(木下尙江)

八百屋お七の墓に立ちて(孤劍)

性論と社會主義(石川生)

學者と社會主義(金子喜一)

幸徳君足下 [A. Johnson]

暗潮 [有香]

大家先生の戦後經營(山田滴海)

社會主義運動基金募集

本紙擴張に就ての注意

同志の運動・傳道行商の記

〔小田生・山口生〕・社會主

議研究會(平民社)・社會主

議演說會(北總平民俱樂部)

・九州社會俱樂部例會(日

向宮崎)・横濱曙會より・

岡山いろは俱樂部・神戸平

民俱樂部第六例會・横濱社

會主義演說會・社會主義演

說會(日本橋)〔石川〕

通俗社會主義(豫告)〔堺利彦〕

第二卷第二號(明治卅八年二

月十二日)

〔新人〕の國家宗教〔木下尙江〕

内外時事・露國革命運動の經

過・政界弊風の犠牲・是れ

偶然の出來事なる乎・浦賀

船渠會社の同盟罷工・浦和

の消費組合・盲人保護の議

・萬國社會黨運動一覽

感慨一律寄幸徳西川兩兄

〔福軒誠〕

露國革命の祖母

誰か村の改革者たる者ぞ

〔小田野聲〕

函根宮の下より

〔泣蟲みつ〕

芦の湖畔の一日

〔みづ〕

結婚とは何ぞや

〔白柳秀湖〕

社會主義日曜學校

〔金子喜一〕

東西南北より

秋白兩君に寄する歌〔戸谷董香〕

少女の私有財産

〔少翁生〕

通俗社會主義(ブラチフオート

著・堺枯川抄譯)

女囚を憐れむ

〔孤劍〕

平民社より

同志の運動・足尾銅山遊説

〔松崎源吉〕・社會主義婦人

講演・社會主義談話會(吉田

璣)・早稻田社會學會例會

〔吉田璣〕・神戸平民俱樂部

より・救世軍横須賀小隊よ

り〔鬼骨〕・陸奥國下北郡よ

り〔菊地叔三〕・土佐平民俱

樂部例會・大阪讀者會例會

天地と人間

〔松岡ふみ〕

第二卷第三號(明治卅八年二

月十九日)

露國革命が與ふる教訓

内外時事・萬朝報の富豪攻撃

・沖繩の早魁・自殺又自殺

・銀行者と第四回債券・騙

取と偽造・學生の同盟休校

・浦賀同盟罷工の落着・清

國學生と日本警察・人力車

賃錢均一・徴兵を忌避して

傷く・名士と海軍省

大審院公判

幸徳西川兩氏送別會の禁止

矛盾の世の中

〔旭山生〕

社會主義運動統計
番臺より主義を説く

〔庄司萬三郎〕

雜誌品隣

函根山中の社會問題

〔西川生〕

怪しからぬ奴

〔石井生〕

女男兩性の關係

〔トルストイ〕

主義の歌

〔金子喜一〕

社會醫に望む

〔孤劍〕

社會主義の歌

〔滴海逸民〕

紳士間の音樂會

〔滴海逸民〕

東西南北より

通俗社會主義

〔ラチフオード〕

著・堺枯川抄譯

同志の運動・社會主義大演說

會(青年會館)・社會主義研

究會(平民社)・労働者談話

會(西川生)・北總青年會社

會主義研究會(吉田璣)・神

戶平民俱樂部第六例會・函

館平民俱樂部(内藤生)・

俱樂部設立(横濱曙會)・信

州神川村讀者會・千葉讀者

會・信州神川村讀者會

〔枯川生〕

平民社より

〔森近生・枯川生〕

第二卷第四號(明治卅八年二
月二六日)

遺族扶助料の爭議

〔木下尙江〕

平和の風説

〔有香〕他

大審院の判決

幸徳西川二氏の入獄

大光明の前途

内外時事・皇室と民間の争

訟・模範村長歡迎會・政治

家と資本家・桂、野田、大

倉・社會主義の學校・露國

平民の勝利・露國革命黨に

對する同情・我國の癩病患

者・更紗職工の同盟罷工・

那威社會黨の勝利・長老ガ

ボンの人物・英國の失業者

問題・ルイズ・ミツシエル

傳・天皇陛下より酒肴料

雜誌品隣

國家の膨脹と人民の幸福(英國

労働運動史を讀む)〔西川生〕

富者天國に入るべき乎〔孤劍生〕

主權發達論

萬國社會黨本部の報告

東西南北より

通俗社會主義〔ラチフオード

原著・堺枯川抄譯

同志の運動・社會主義演說會

(千葉縣)〔西川生〕・行徳町

演說會(遊說者の一人)・三

人組傳道行商〔原子・渡邊・

深尾)・米國桑港新年小會・

労働者談話會・家賃問題演

說會・横濱の直言愛讀者に

告ぐ・岡山いろは俱樂部例

會

白熊兄に

〔兒玉花外〕

直行社

〔大森の留守番〕

平民社より

〔枯川生〕

第二卷第五號(明治卅八年三

月五日)

明治時代の政教史

歌

兄弟姉妹よ

〔幸徳生拜手〕

日本之新聞・喧議會は閉ぢぬ

・女權擴張の請願・普通撰

擧の請願・言論出版の自由

に關する請願

社會主義の傳道者

忍びの門

〔西川生〕

世界之新聞・露國革命彙報・

英國の新聞トラスト・英米

に於ける發狂者の増加

言論出版の自由に關する質問

新聞賣の記

〔ふみ〕

行徳町の今昔

〔旭山生〕

雜誌品隣

〔秀湖生〕

東西南北より

屠牛場

〔孤劍〕

成田の圖書館

〔白熊生〕

讀者諸君、同志諸君に望む(九

州傳道行商につきて)

〔小田頼造〕

通俗社會主義(ラチフオード

原著・堺枯川抄譯)

吾等が歌

〔林三十六郎〕

戰地だより

〔△△△〕

片山潛氏の消息

〔片山潛〕

同志の運動・紀州木の本町遊

說の一日(綠亭生)・社會主

義研究會(平民社)・社會主

義演說會(横濱曙會)・土浦

社會主義演說會(茨城縣)・

第七高等學校より(鹿兒島)

・土曜會發會式(佐渡相川

町)・鶴岡社會主義研究會

(山形縣鶴岡町)〔笹原定治

郎)・筑後の同志に告ぐ・

千葉羽衣會の創立・神戸平

民俱樂部第七例會・岐阜平民會

東西南北より
通俗社會主義〔プラチナフォード
原著・堺枯川抄譯〕

平民社より
新刊紹介 〔枯川生・旭山生〕

源氏物語に於ける女性
〔菅谷岩子〕

第二卷第六號(明治卅八年三月十二日)

露國革命の淵源

同志の運動・社會主義婦人講演(平民社)〔つゆ子〕・社會主義演說會(淺草植木屋)

柴垣 〔樋口配天〕
行く雲 〔樋口配天〕

〔大王〕・能登中學校社會主義演說會・橫須賀平民舍懇和會・京都市社會主義談話會(家城)・兩毛地方の同志に告ぐ〔吉田璣〕・小樽區讀者會(北海道)・社會主義研究會(名古屋)

日本之新聞・當今政黨の囁語
・主戰論者の責任・高利國價の好景氣・青眼白眼

阿戰爭の結果
エスベラント語の話〔枯川生記〕

共產黨宣言公判 〔熊谷生〕

戰後思想界の準備
東西南北より

幸徳氏に面會 〔熊谷生〕

社會主義者の愛國心 〔石川生〕

世界之新聞・萬國社會黨本部委員會・佛國社會黨統一條件・空腹の小學生七千人・英國勞働代表運動大會・獨逸鑛業界の大爭鬭・人命の代價・萬國語エスベラント

『冥想の結果』に非ず 〔高島圓〕
平民社より 〔枯川生〕

大審院判決書 〔片山潛〕

第二卷第七號(明治卅八年三月十九日)
俘虜諸君に告ぐ

勞働者諸君に告ぐ 〔片山潛〕

歌 〔半生〕他
日本之新聞・平和は近けり・義戰論者に問ふ・政府と名士・哀れなる軍人家族・侯爵大將夫人と一老婆との爭

社會主義の處女演說〔金子喜一〕

露帝を絞罪に處す
同志の運動・社會主義研究會(平民社)〔大王生〕・飛驒政談演說會〔枯柳庵大夢軒〕・第三回岐阜平民會(△△生)・土佐平民俱樂部第三回例會・土佐平民俱樂部第四回

皇室の財産 〔小有り〕

世界之同志に謝す
雜誌品騰 〔松岡ふみ子〕

言論自由の請願は擱潰しに非ず 〔柏谷義三〕

革命諸派の會合・那威諸市に於ける社會黨の勢力・南阿戰爭の結果
日本紳士閣の解剖
『富の壓制』を讀みて 〔一讀者〕

世界之同志に謝す
雜誌品騰 〔松岡ふみ子〕

世界之新聞・英國々會に於ける勞働黨の勢力・英國勞働代表委員大會・露國革命の先鋒は御用勞働組合・露國革命諸派の會合・那威諸市に於ける社會黨の勢力・南阿戰爭の結果
エスベラント語の話〔枯川生記〕

戰後思想界の準備
東西南北より

社會主義者の愛國心 〔石川生〕

思想の革命 〔小田野聲〕

『文士』と社會主義 〔築田生〕

製糸工女の歌 〔枯川生〕

平民社より
露帝を絞罪に處す
同志の運動・社會主義研究會(平民社)〔大王生〕・飛驒政談演說會〔枯柳庵大夢軒〕・第三回岐阜平民會(△△生)・土佐平民俱樂部第三回例會・土佐平民俱樂部第四回

例會・隣人會設立〔三浦半島の同胞に告ぐ!〕・埼玉縣川越町より・近村の同志に告ぐ〔埼玉縣南埼玉郡小林村〕〔岩崎秋次郎〕

新刊紹介 〔旭山〕

第二卷第八號(明治卅八年三月二十六日)

日本紳士閣の解剖
『富の壓制』を讀みて 〔一讀者〕

日本之新聞・新聞社會の耻辱
・私有財産的官煙の毒・戰爭の罪・鑛毒地人民の哀訴
・早稻田大學の雄辯會・青眼白眼

芋錢子より
世界之新聞・伊國勞働者大會・那威に於ける社會黨の發達・金子喜一氏の演說・萬國の勞働者諸君(露國革命運動の援助を要求する檄)

雜誌瞥見
滅茶苦茶なる米國の社會

畜生戀(上) 〔山口孤劍〕

平民社より 〔枯川生〕

白柳秀湖

〔枯川生〕

濱曙會・信州小縣郡神川
村讀者會・社會主義研究会
(名古屋)

雜誌意見
ポストン便り (金子喜一)
さくら宗吾(上) (そりり)
編集雜事
勞働に生きよ(續) (小野有香)
通俗社會主義 (ラチフオード)

傳道行商日記(二)
編輯雜事

原著・堺枯川抄謄
鮫ヶ橋の貧民窟 (原子草水)
拘留の一夜 (山口生)

第二卷第十一號(明治卅八年)

四月十六日)
借地人諸君に告ぐ (石川生)

同志の運動・社會主義婦人講
演(平民社)・九州傳道行商
記(一)(小田頼造)・横須賀
平民會演說會(岡起雲)・い

日本之新聞・模範巡查・模範
看守・産業組合中央會趣意
書・不條理なる地代値上・
渴者の飲・畫家獎勵會・女
學生と社會主義

ろは俱樂部春季大會・岡山
平民會例會・横濱勞働者觀
櫻會・川越遊說(吉田民鐵)
・神戸平民俱樂部第八例會
・野花・社會主義演說會
(東京(山口生)・越後同志
大會(長岡)・火鞭會告白
平民社より (枯川生)

『直言』婦人號(豫告)
世界之新聞・露西亞に於ける
土地の分配・露國革命家キ
ルコフ公・露國婦人の奮
闘・暗殺者の辯明・米國の
少年勞働者・貧者に子を産
むの權利無し・勞働者團結
の禁止・ポベドノステエフ
の辭職・佛國帝政黨の陰謀
・南阿清人の罷工

醒めよ、婦人 (木下尙江)

無欲なる人物
生庄の目的を論ず (山田滴海)

第二卷第十二號(明治三八年)

四月二三日)
II 婦人號II

日本之新聞・女學生と社會主
義・母を殺す娘あり・墮胎
と情死・女萬引
共産黨宣言被告事件公判
狂愚なる政府 (旭山生)
婦人問題概觀 (堺利彦)
桃紅李白 (松華女史)
世界之新聞・英國婦人選舉權
獲得運動の小歴史・婦人選
舉權大會・消費組合と婦人
・女中の同盟罷業
如何にして社會主義者となりし
乎
獨逸軍人の結婚 (石川旭山)
社會主義の婦人運動
結婚は唯金に由る(轉載)(エン
ゲルス著『家族の起原』の一
節)
一萬八千の女教員 (不可汚生)
探偵さんとお花見 (た め)
さくら宗吾 (そりり)
校の音 (樋口配天)
平民社より (枯川生)
同志の運動・東北傳道行商日
記(荒畑勝三)・甲信傳道行
商日記(三)(原子基・深尾
詔)・社會主義研究会(平民

第二卷第十三號(明治卅八年)

四月三十日)
戀愛中心の社會問題(木下尙江)

日本之新聞・社會主義と『大
御心』・國民兵召集の勅令
・男女兩性に關する論議・
國民新聞を讀まざる者は免
職す・農商務省と勞働問題
・少年勞働の増加・共産黨
宣言事件公判
米國の同志より
編輯雜事
世界之新聞・平民新聞廢刊に
就て・米國に於ける片山潛
氏・ケア、ハーデー氏の建

第二卷第十三號(明治卅八年)

四月三十日)
戀愛中心の社會問題(木下尙江)

日本之新聞・社會主義と『大
御心』・國民兵召集の勅令
・男女兩性に關する論議・
國民新聞を讀まざる者は免
職す・農商務省と勞働問題
・少年勞働の増加・共産黨
宣言事件公判
米國の同志より
編輯雜事
世界之新聞・平民新聞廢刊に
就て・米國に於ける片山潛
氏・ケア、ハーデー氏の建

議・資本家の犠牲・最近に於ける獨逸社會黨の發達・倫敦府下の無宿者・伊太利勞働者の勝利・白耳義抗夫の同盟罷工・瑞典の社會黨片山潛氏の消息〔片山潛〕性慾論(上) (Carpenter 氏著 Love's Coming-of Age of 一章) 〔枯川生抄譯〕

東西南北より

さくら宗吾

平民床

平民舍ミルクホール

繪姿

怠惰の福音 II 『富の壓制』の一節 II (轉載)

令弟の戦死に就きて〔福軒手記〕十日の旅

ミッシンコンスタイルに在る女學生諸君に送る

同志の運動・九州傳道行商記

〔小田頼造〕・東北傳道行商日記(二)〔荒畑勝三〕・前橋に於ける活動〔吉田璣〕

・大阪平民社茶話會〔赤人〕

・名古屋社會主義演說會

〔山羊生〕・横濱の二日間

〔原子甚〕・早稻田社會學會臨時集會(おとき)・筑後同志會(會員)・上毛直言讀者會(高崎)〔布施月香〕・社會主義研究會(名古屋)〔鈴木植雄〕・名古屋社會主義者會合・岐阜平民社

第二卷第十四號 (明治卅八年五月七日)

日本政府、對、社會黨

砂糖水社會主義

國家的資本家主義

恐怖の結果也

膏藥、塗藥の類

飴を嘗らせる者

日本之新聞・高利國債の好況

・貧民を絞りにて富有を利する國債・偽善の鐵鎖・大隈

氏の撰擧權擴張論・資本合

同の大勢・青眼白眼

巢鴨の歌

嗚呼九十九里

編集雜事

世界之新聞・亞爾米尼革命黨

の急訴・露國の五月一日・

ガボン長老と社會黨・濠洲

に於ける社會黨・リスニヤに於ける社會主義・獨逸政府續續税を起さんとす

巢鴨の詩

性慾論(下) 〔枯川生抄譯〕

雜誌品階

吉田璣氏に關する嫌疑

黃金政治の模範村

〔深尾少翁〕

枯川兄の素食主義を讀みて

〔大石祿亭〕

萬國勞働者紀念日五月一日

勞働の赤旗

王子の勞働者

同志の運動・九州傳道行商記

〔孤劍生〕

〔旭山生〕

〔小野木辯郊〕・いろは俱樂部

觀櫻會(岡山)〔Y O 生〕・佐野同胞會(栃木縣)

第二卷第十五號 (明治卅八年五月十四日)

吾黨の候補者

宣言書

日本之新聞・東京市の補缺選

舉・東京市の有權者幾許・

貴族富豪と兵役・鐵道乘客

階級廢止論・門司に大同盟

罷工起らんとす・基督教と

日本皇室・基督教昔ばなし

社會黨選舉運動日誌

世界之新聞・露國革命の成行

・初號にて終刊せる社會黨

新聞・露國ロジに於ける虐

殺・デブス氏の傳道旅行・

同盟罷工と社會主義・獨逸

鑛業法改正案・オクラン

ドの社會主義・丁抹社會黨

の成功・百萬の勞働者飢ゆ

・伊太利の鐵道國有・濠洲

の婦人選舉權

迫害錄

マツジニの社會主義評

春秋の譜

平民社より

買收されたる米國の大學及教會

お百度詣(轉載) 〔金子喜一〕

〔大塚桶緒子〕

〔小野有香〕

〔小野有香〕

〔小野有香〕

東西南北より

通俗社會主義〔ブラチフオード
氏原著・堺枯川抄譯〕

運動基金募集
同志の運動・九州傳道行商日
記(四)〔小田頼造〕・東北傳
道行商日記(四)〔荒畑勝三〕

・社會主義大演說會(神田
今金)・婦人講演會(平民社)

・社會黨選舉演說會(神田
三崎町)・社會黨選舉演說會
(芝區兼房町)・社會主義研
究會(大阪平民社)・大阪平
民社業務成績(森近生)・長
洲町談話會(肥後)〔松隈〕・
豊岡町讀者會(但馬)〔尾藤
孤應〕・函館平民俱樂部第
六次小集・橫濱社會主義演
說會(橫濱曙會)

土方の歌

社會主義の歌

第二卷第十六號(明治卅八年
五月二十一日)

禁黨の紀念

我が行く道は前に在り〔一讀者〕

社會黨選舉運動日誌(續)

日本之新聞・社會黨の樹立・
露骨なる選舉干渉・社會主
義と伊藤博文氏・門司同盟
罷工の落着・弱者の運命
秘密探偵嫌疑者處分
吾黨の選舉人に謝す

世界之新聞・失業者の示威運
動・露國革命の餘瀝・婦人
解放案・ケア、ヘーデー氏
の注意と質問・波蘭の愛國
者・支那の勞働組合・社會
主義者巴里市會議長に當選
す・軍備費國家を倒す

味噌汁を以て汝等の面を洗來れ

編集雜事

クリスチアン活動の新方面

〔石川旭山〕

寄附金十萬圓の倫理〔金子喜一〕

地主大王

女性犯罪の兩面

新會のお釋迦様

通俗社會主義〔ブラチフオード
氏原著・堺枯川抄譯〕

平民社より

運動基金募集

同志の運動・九州傳道行商日
記(五)〔小田頼造〕・東北傳
道行商日記(五)〔荒畑勝三〕

・湘南の五日〔原子基〕・橫
濱社會主義演說會(橫濱曙
會)・土佐平民俱樂部の解
散・第三回小樽區讀者會・
筑後同志會・社會主義研究
會(橫濱曙會)

第二卷第十七號(明治卅八年
五月二十八日)

探偵論

彼は牢獄に在り

日本之新聞・雪嶺先生亦老い
たり・清浦農相の資本家制
度論・吳服小商人の恐慌・
同盟罷工頻々たり・『伊藤
公と社會政策』・青眼白眼
編集雜事

世界之新聞・バンド連合大會
議・紐育に於けるバーナム
嬢・少年勞働者の慘狀・失
業者の軍勢・外人勞働者入
國制限法の修正・ルクセン
ブルグの社會黨壓迫・露國
婦人の活動

米國に於ける婦人記者〔紅桃子〕

藝術の神聖を如何〔山口孤劍〕

日本人排斥とは何ぞや

東西南北より

眼

百姓嘆

牛乳店より申上ます

火鞭會の記

つれづれ草

片山潛氏の消息

附言す

社會主義の歌

平民社より

運動基金募集

同志の運動・九州傳道行商日
記(六)〔小田頼造〕・東北傳
道行商日記(六)〔荒畑勝三〕
・社會主義學術演說會(青
年會館)〔石川生〕・北米桑港
より〔岩佐作太〕・運動雜記
〔能登生〕・金澤市直言讀
者茶話會(始島生)・函館平
民俱樂部第七次小集〔一平
民〕・神戸平民俱樂部第九例
會〔野花〕・名古屋社會主

義相談會(小羊生)・社會主義研究會(大阪平民社)・橫濱曙會の研究會(荒大王)・社會主義演說會(橫濱曙會)・社會主義研究會 香川、愛媛、大分、縣下の「朝日福太郎」

第二卷第十八號 (明治卅八年

六月四日)

大軍備の兒戲

誰か奪へる

草も木も

日本之新聞・國家的大賭博・紳士閥の活畫・軍人崇拜の愚・損失發表の好時期・任務に斃れたる職工・臨時議會召集の説・鎮毒被害地谷中村の豐作

〔樋口配天〕

週刊新聞『直言』總目次と解説

勞働者諸君是でも醒めざる乎

〔らせむ〕

第二卷第十九號 (明治卅八年

六月一日)

不品行史概論

病監の秋水

日本之新聞・桑田熊藏氏の名論・平民の負擔又三億萬圓・資本家の世界主義・青眼白眼

〔幸徳千代子〕

大りに於ける驚くべき貧民

・匈牙利社會黨の勢力・佛國軍制の改革・丁抹に於ける八時間問題・佛國社會黨合同の成立・英國社會主義のリゾイザル・市參事會同盟罷工を援け

〔枯川生譯〕

讀者會・橫濱社會主義研究會・北越同志會(長岡)

開盛座の『片輪根性』(霞外生)

〔孤劍生〕

第二卷第二十號 (明治卅八年

六月十八日)

『平和』に急げ

秋日二兄を想ふ

日本之新聞・平和の曙光・媾和條件・資本合同の勢ひ・模範軍國民、模範軍人家族編輯雜事

世界之新聞・英國獨立勞動黨大會・布哇日本人の大同盟罷工

〔孤劍生〕

六一 (七〇五)

社會學會(中川紅桃)・鹿兒島平民俱樂部(KF生)・筑後同志會(柳河町)・室蘭平民俱樂部・社會主義研究會(紀州田邊)・山形市附近の同志に告ぐ(庄司、岡崎、木崎)・菊の舍の小晚餐會(枯川生)・佃島同志茶話會

白耳義社會黨大會・シカゴ駭者同盟罷工・埃太利市政に於ける社會黨・露帝と國民議會・北米合衆國坑夫大會

子基助・吉野省一)・葵同志社解散(山中生) 平民社より(枯川生・ふみ子)

巢鴨だより(秋水・西川光次郎) 下谷區萬年町貧民窟の狀態(一) (齋藤兼次郎) 看病紀行 (赤人)

成田の斷食堂 [そろり] 新村紹介 [旭山生]

火の柱 [孤劍] 生産方法の變遷(ハイドマン氏 原著・枯川生譯) 無慾なる小兒 腕は我等が生命なり [一讀者] 雜誌瞥見 科學の進歩何する者ぞ

我が行く道 歸省學生に勸む 夏期遊説の計畫 日本之新聞・霖雨と貧民・奴隸買賣の現存・ラッセル氏の仔虜遊説・九鐵の石炭船 積器械・青眼白眼 平民社より

大慈觀せよ [石川生] 血染の赤旗 夏期遊説の計畫 日本之新聞・社會主義の小學 教員・國語に現はれたる保守主義・基督敎と社會主義

第二卷第二十一號(明治卅八年六月二十五日)

社會主義別名相互主義(フランク、バーンソンの著より) 慈善主義の彈劾 [三十六郎投] 佐渡の俚諺 [枯川生] 天涯偶語 [嚴穴生] 無我苑訪問の記 [枯川生]

活版工組合誠友會大會 世界之新聞・南阿に於ける社會主義・露國革命運動・諸國社會黨集會彙報・露國の同盟罷業・産業組合と社會黨との大合同・北米に於ける罪人及狂人・清國立憲政體に關する建議・非軍國主義運動 生産方法の變遷(ハイドマン氏 原著・枯川生譯)

謀殺的労働 [山口孤劍] 慈善心 [原霞外]

日本之新聞・經濟學協會の演說・八島艦以下の喪失・三麥酒會社合同・富豪の鑛山事業・青眼白眼 夏期遊説の計畫 編集雜事

東西南北より [山口孤劍] 人情の獨立 [石川旭山] 人情の獨立 [嚴穴生] 天涯偶語 [嚴穴生] 無我苑訪問の記 [枯川生]

國社會黨集會彙報・露國の同盟罷業・産業組合と社會黨との大合同・北米に於ける罪人及狂人・清國立憲政體に關する建議・非軍國主義運動 生産方法の變遷(ハイドマン氏 原著・枯川生譯)

謀殺的労働 [山口孤劍] 慈善心 [原霞外]

世界之新聞・英國社會民主同盟大會・蘇格士蘭の同盟罷工・キクトルニューゴアの銅像・英國諸市會議員選舉・

義演說會の解散(神田) [荒大王] 社會主義研究會(大阪平民社) [赤人]・函館平民俱樂部(一平民)・神戸平民俱樂部(阿大王)・南濱同志會(臺北) [申衣]・佃島同志茶話會(菊池生)・門司市及び附近の同志諸君へ(村

國社會黨集會彙報・露國の同盟罷業・産業組合と社會黨との大合同・北米に於ける罪人及狂人・清國立憲政體に關する建議・非軍國主義運動 生産方法の變遷(ハイドマン氏 原著・枯川生譯)

謀殺的労働 [山口孤劍] 慈善心 [原霞外]

世界之新聞・英國社會民主同盟大會・蘇格士蘭の同盟罷工・キクトルニューゴアの銅像・英國諸市會議員選舉・

義演說會の解散(神田) [荒大王] 社會主義研究會(大阪平民社) [赤人]・函館平民俱樂部(一平民)・神戸平民俱樂部(阿大王)・南濱同志會(臺北) [申衣]・佃島同志茶話會(菊池生)・門司市及び附近の同志諸君へ(村

國社會黨集會彙報・露國の同盟罷業・産業組合と社會黨との大合同・北米に於ける罪人及狂人・清國立憲政體に關する建議・非軍國主義運動 生産方法の變遷(ハイドマン氏 原著・枯川生譯)

謀殺的労働 [山口孤劍] 慈善心 [原霞外]

世界之新聞・英國社會民主同盟大會・蘇格士蘭の同盟罷工・キクトルニューゴアの銅像・英國諸市會議員選舉・

義演說會の解散(神田) [荒大王] 社會主義研究會(大阪平民社) [赤人]・函館平民俱樂部(一平民)・神戸平民俱樂部(阿大王)・南濱同志會(臺北) [申衣]・佃島同志茶話會(菊池生)・門司市及び附近の同志諸君へ(村

國社會黨集會彙報・露國の同盟罷業・産業組合と社會黨との大合同・北米に於ける罪人及狂人・清國立憲政體に關する建議・非軍國主義運動 生産方法の變遷(ハイドマン氏 原著・枯川生譯)

謀殺的労働 [山口孤劍] 慈善心 [原霞外]

世界之新聞・英國社會民主同盟大會・蘇格士蘭の同盟罷工・キクトルニューゴアの銅像・英國諸市會議員選舉・

義演說會の解散(神田) [荒大王] 社會主義研究會(大阪平民社) [赤人]・函館平民俱樂部(一平民)・神戸平民俱樂部(阿大王)・南濱同志會(臺北) [申衣]・佃島同志茶話會(菊池生)・門司市及び附近の同志諸君へ(村

國社會黨集會彙報・露國の同盟罷業・産業組合と社會黨との大合同・北米に於ける罪人及狂人・清國立憲政體に關する建議・非軍國主義運動 生産方法の變遷(ハイドマン氏 原著・枯川生譯)

謀殺的労働 [山口孤劍] 慈善心 [原霞外]

逸に在るポーランド人大會

・カナダ社會黨の創立・巴

里の同盟罷工・マドリッド

の慘事・萬國坑夫大會

生産方法の變遷(「ハイドマン氏

原著・堺利彦譯)

編輯雜事

飲食物の市營

七月二日の本郷教會(石川旭山)

下谷區萬年町貧民窟の状態(二)

〔齋藤兼次郎〕

平民社より

赤十字狂

〔綠亭生〕

社會主義の歌

〔孤劍生〕

雜誌瞥見

同志の運動・九州傳道行商日

記(十二)(小田頼造)・活版

工組合誠友會大會・神戸平

民俱樂部例會・社會主義學

術演說會・横濱及び附近の

同志に告ぐ(横濱曙會)・羽

田社會主義研究會(木俣覺

定)

松岡荒村君を憶ふ(白柳秀湖)

『荒村遺稿』に就て

〔遺稿出版發起人一同〕

社會主義とは、ドンナもの

〔山紫樓〕

佛耶兩教會の墮落

第二卷第二十四號(明治卅八

年七月十六日)

新神聖同盟

木下尙江氏の遊説

日本之新聞・聖代太平の象・

産業合同の氣運・『荒村遺

稿』發賣禁止・中部製紙工

場の同盟罷工・大阪天王寺

中學の同盟休校・青眼白眼

世界の新聞・北米ニューチア

ーシー社會黨大會・埃伊社

會黨の聯合・獨逸に於ける

ジョーレス氏の言論・ワル

キツク伯爵夫人の大演說・

瑞西機織工同盟大會・佛國

巡查の同盟罷工・マキジム

・リスボン子氏死す・労働

者寫眞の提出・日曜労働禁

止法案・佛國に於ける婦人

労働者

東西南北より

生産方法の變遷(「ハイドマン氏

原著・堺利彦譯)

倫敦に於る的反響(「鬼塚見十郎)

雜誌瞥見

佛耶兩教會の墮落

〔山紫樓〕

紳士閣飼養の文學者

〔孤劍生〕

社會主義とは、ドンナもの

〔山紫樓〕

話の聞書

『良人の自白』中篇批評會

〔中川生〕

下谷區萬年町貧民窟狀態(三)

〔齋藤兼次郎〕

同志の運動・九州傳道行商日

記(十三)(小田頼造)・九州

傳道行商日記(十四)(小田

頼造)・早稻田社會學會・

函館平民俱樂部

編輯雜事

平民社より

〔利彦〕

第二卷第二十五號(明治卅八

年七月二十三日)

來るべき專制力

無意味なる憲法

憲法の上に警察あり

政府の詐欺的迫害

野に叫ぶ人の聲

幸徳君の出獄歡迎(平民社同人)

日本之新聞・鐘淵紡績の職工

待遇・大阪電燈會社總會の

紛縛・豪農の無慈悲・貯蓄

債券月賦拂の奸計・工場法

案・電燈會社の合併・青眼

白眼・陰險なる迫害・時事

日記

木下尙江氏の遊説

世界の新聞・鐵道會社員の同

盟罷工・獨立労働黨共働組

合連大會・英國失業者の

決議・社會主義日曜學校・

匈牙利労働組合の進歩・佛

國大革命前に髻髻たり・ラ

イセスターの失業者倫敦に

向ふ・伊國共働同盟の閉墾

計畫・露國婦人の大會・北

米二州社會黨の知事候補者

・北米ロードアイランドの

指名會

社會主義と婦人の道德(「社會主

義と婦人」の一節)(山口孤劍)

社會主義と海老名君

〔堺利彦〕

又發賣禁止

樂天の眞意義

〔石川生〕

下谷區萬年町貧民窟の狀態(二)

〔齋藤兼次郎〕

東西南北より

貧窮問答の歌を讀む(「荒村遺稿

より轉載)

嗚呼娼妓

〔荒畑生〕

『社會主義と婦人』の序(堺利彦)

大鹽先生を懷ふの歌

〔孤劍生〕

週刊新聞『直言』總目次と解説

六三 (七〇七)

故松岡荒村一周忌

同志の運動・社會主義茶話會

(神田)(石川生)・東北傳道

行商日記(七)(荒畑勝三)・

室蘭平民俱樂部(野人)・鹿

兒島平民俱樂部(KF生)・

札幌區及び附近の同志諸君

へ(瀧川勇吉)・廣島縣人に

告ぐ(柏生)

平民社より (界生)

第二卷第二十六號(明治卅八年七月二十八日)

幸徳君出獄歡迎號II

日本之新聞・社會主義と教員

の失職・國語研究會と社會

主義・學校騒動の流行・田

中正造翁捕へらる・東京市

政の腐敗・青眼白眼・大阪

の電鐵市營・趣味ある對照

僕の衷情(出獄の幸徳君に告ぐ)

(堺利彦)

幸徳君出迎について

東北遊説

世界之新聞・露國革命運動・

清國の社會黨・和蘭内閣の

購着手段・伊太利鐵道罷工

の結果・資本家の絶望・漢
堡市の無法

迎秋水君 (山田金市郎)

出獄歡迎 (有香)

幸徳君を迎へて我希望を語る

(木下尙江)

我が愛子は殺されたり(山口生)

幸徳君の出獄を迎ふ(坂井生)

東西南北より

秋水兄を迎ふ (石川生)

猛士を迎ふ (不知火)

忘れられたる谷中村(荒畑生)

『社會主義と婦人』を讀みて山

口孤劍君に寄す (樋口傳)

同志の運動・東北傳道行商日

記(八)(荒畑勝三)・チラシ

配布の記(札幌)(札幌一同

志)・横濱演說會(滴海記)・

金澤同志茶話會(右)・社會

主義茶話會(紀州田邊)

秋水兄を迎ふるの歌(孤劍)

平民社より (界生)

第二卷第二十七號(明治卅八年八月六日)

難者に答ふ (堺利彦)

日本婦人の新使命(轉載)

あゝ人類は醒めざる乎(孤劍)

日本之新聞・二個の同盟罷工

・義旗表式・巡査の月給

を増加せよ・谷中村民の大

舉上京・青眼白眼

東北遊説 (秋水病夫)

赤色旗 (秋水)

獄中雜唸

世界之新聞・支那に於ける社

會主義・露國革命彙報・英

國失業者保護法案・白耳義

王位繼承問題・ワーキック

伯爵夫人招聘せられんとす

・瑞典社會黨の偉大なる活

動・那威國の失業者・瑞西

社會黨の進歩・獨乙社會黨

の勢力・婦人と選舉・匈牙利

利農業労働者の團結

柏木より (幸徳生)

東北漫遊日記 (木下生)

田園の頽廢 (山口孤劍)

幸徳君出迎の記 (堺生)

輕井澤論(一) (土屋窓外)

川柳會心(川柳卷選より) (堺生選)

巢鴨だより (西川光次郎)

雜誌瞥見

遍く三等郵便局員に檄す

(宮崎生)

同志の運動・東北傳道行商日

記(九)(荒畑勝三)・神川村

讀者會(信州)(山邊清太郎)

・横濱社會主義演說會・横

濱社會主義演說會・神

戶平民俱樂部例會・社會主

義學術演說會(紀伊新宮町)

〔大石誠之助〕・秋田縣の同

士に告ぐ(加茂谷 若松)

故鈴木秀男君追悼會

第二卷第二十八號(明治卅八年八月十三日)

日本人排斥と社會主義

角笥の鬼婆 (秀湖生)

文明の直譯 (秀湖生)

博士と鬼婆 (秀湖生)

首相と鬼婆 (秀湖生)

日本之新聞・東京市電車問題

・貧民窟を郊外に移すの計

畫・貫ひ子殺しの職業・國

家社會主義の講習・新佛敎

會堂建設計畫・櫻組職工の

不穩・大阪塔銅工同慘事・
牛込の自殺未遂・バナマ移
民禁止

『社會主義と基督教』に就て

紀念のチラシ

世界之新聞・佛國に於ける婦
人労働問題・露國革命黨報
・埃國カトリック寺院の財
産・佛蘭西礦業法・丁抹に
於ける新政黨・十時間制の
世界的實行・英國に於ける
新立社會黨・獨逸礦業法案・
南濠洲労働黨の勢力・諾、
瑞分離問題・岑總督の遭難

小田原より

東北遊説日記(一)

東北遊説日記(二)

浮世の旅

輕井澤論(一)

東西南北より

社會主義者は實行者ならざる可
らず

雜誌瞥見

編輯雜事

川柳會心に就て

嗚呼鈴木秀男君

同志松岡成雄氏逝く
同志の運動・歸省途上の傳道

〔阿南卓〕・札幌平民俱樂部
・函館平民俱樂部

故堺みち子氏追悼會
紀州だより

〔兒玉生〕

第二卷第二十九號(明治卅八
年八月二十日)

社會主義と愛國心

日本之新聞・日露媾和問題・
鹽專賣の弊・大阪時事新報
の『慰安旅行』・貸長屋建
築取締規則・谷中村問題・
聯合教育會の決議

小田原日記

平民社より(平民社の改革に就
て)

石川生申す

世界之新聞・萬國社會黨本部
會計報告『日本社會黨の責
務は幾何』・獨逸礦業法案
・諾威國分離雜問題・伊國
大理石礦夫の同盟罷工・反
亂爆發一東

平民社財政の現状

東北遊説日記(續)

天下の奇法

東北遊説日記(續)

吉岡町の同志より

清岡二日の記(一)

罪惡なき者ある乎

宮崎兄に答ふ

沐猴冠(秋水氏の『獄中雜唸』
に模して)

歸郷雜味

憤の炎

同志の運動・鈴木君追悼會の
記(寒村生)・室蘭平民俱樂
部例會・青森杜鵑會例會(星
生)・門司労働協會記事(吉
野)・同志諸君に謝す(横濱)
山生

悲歌一曲(利根の川畔に老夫の
歌へるうた)

第二卷第三十號(明治卅八年
八月二十七日)

社會主義と愛國心(ペーベル氏)
日本之新聞・國家社會黨創立
・同盟罷工の續出・職工養
成及保護の方法・労働保險
法・『讀賣』の社會主義評

論

小田原日記

世界之新聞・社會主義と愛國
心・シカゴ産業同盟大會・
濠洲首相と社會主義・伊太
利小學兒童の糧食問題・養
老金制度の討論・伊太利勞
働組合の新機關・レクリー
氏の死去・波蘭人ストライ
キの勝利・歐洲農夫の同盟
罷業

トルストイ翁の返書

夏季と犯罪

社會主義の上より觀たる俚諺

激湍集

子の半生(轉載)『半生の墓』の
一章

社會主義と貧民問題

倫理教育の側面觀

雜誌瞥見

同志諸君に語る(平民社改革に
就て)

告別の辭『銃を取るべく、劍を
佩ぶべく』(熊谷千代三郎)
帝國主義を呪ふの歌

同志の運動・北米プレスノ社會主義研究會・南浜同志會(臺北)・申衣生・鹿兒島平民俱樂部(KF生)・曙會俱樂部(横濱)・五日間の運動「森川松壽」・横濱曙會の演説(少翁)

平民農場より「原子基・深尾詔」社會主義の大意(轉載)「堺利彦」

第二卷第三十一號(明治卅八年九月三日)

社會主義と愛國心

「エンリコ・フェリ氏」

日本之新聞・平和の成立・國家社會黨と社會改良黨・志士の末路・砲兵工廠の職工募集・清國男女學生の活動・紡績業の近況(毎日新聞香摘生)

編輯雜事

西川光二郎君の消息

世界之新聞・愛蘭と資本家制度・ゾラのジョーレス評・ヂョーレス及ペーベル兩氏に打電す・佛國に於ける政教分離法案・北米ブルクリン

府候補者推薦・米國リツチモンドに於ける爭議・濠洲に於ける首相の敗北・濠洲に於ける私有財産・佛國労働者とモロッコ問題・資本家は常に安値労働を索む・巴里市會近時の問題

小田原と柏木村

(秋水)

社會主義と小學教員「不可汚生」

紡績工女

落葉朽葉(一)

東西南北より

かね

今後の平民社「石川三四郎・幸

徳傳次郎・木下

淡路の音信「西川光二郎君の家

庭の消息」

同志の運動・札幌平民俱樂部

・社會主義學術演説(東京

神田)「門外漢」・同志諸君

に告ぐ(横濱)・神戸平民俱

樂部例会

紳士閣の贅澤を見よ「荒畑生」

來れ來れ平民社ミルクホール

「神崎順一・原眞一郎」

嗚呼高瀬久次郎君「山口生」

第二卷第三十二號(明治卅八年九月十日)

政府の猛省を促す

日本の新聞・人民の大示威運動・事の眞因は如何

書空語

世界之新聞・ジョーレス氏の

演説・三大ツラストの新立

・白耳義労働組合會議・濠洲に於ける労働組合・キス

コンシン大學の社會主義

田中正造翁消息

破鍋綴蓋の記

社會主義と愛國心(四)

「ギユスタウ、エルヴェ氏」

信州の大問題(一)

「窓外生」

柏木より

社會主義百話(一)

「秋水」

雜誌瞥見

社會劇を起す可し「吉田笠雨」

湘南の二日

同志の運動・傳道行商を止む

「荒畑生」・歸省途次の傳導

「土浦秋川生」・火雲會の旗

「櫻井仁八」・「予の牛生」

を讀む「白柳秀湖」

註『直言』には毎號英文記事が第一面の最下段に掲載されているがこの目次でははぶいた。「運動基金寄附廣告」「運動基金募集」等の記事もほとんど毎號あるが殊に重要と思われるもの以外は省略した。署名入り以外のごく短い「新刊紹介」記事ものぞき、重要な資料になることは間違いないが會合・演説會その他の豫告などは一切はぶいた。欄外に「本紙は日本社會主義の中央機關也!!!」(Socialism)「ソーシアリズム」社會主義「社會主義の理想は婦人のやさしき心の發展也!!!」その他の標語がみられ、また同じく欄外に「政府の暴戾」(第一一號)として當局の社會主義者彈壓を報じた記事がある。